
裕紀

光太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

裕紀

【Nコード】

N1585C

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

わたしは、幸せです。いままでも、これからも、ずっと。　　ダ

ーク系ショートショート　【2006年執筆】

「わたしがいけなかったの」

裕紀はまるで映画のワンシーンでも見るかのように、奇妙に冷静に、母親を見ていた。

「わたしが、あなたを、そんなふうに育ててしまったのよね」

母親は涙を流していた。裕紀の記憶のなかで、彼女はいつも泣いていた。泣いていない母親の姿を思い出すことなど、不可能と思われた。

「ごめんね、ごめんね……」

謝罪の言葉をくり返しながら、彼女はただ、涙を流した。

小さな小さな母親の前に、ひどくぼんやりと、裕紀はつぶやいていた。

「つまりわたしは、できそこないということよね、お母さん」

裕紀が十六歳の誕生日を迎えるよりも早く、母親は死んだ。

自殺だった。家のリビングで首を吊った。

「それが、自分の責任だと？」

革製の黒いイスに腰をかけた白衣の男性が、柔らかく、問いを投げける。

裕紀は小さく唇の端を上げた。肯定とも、否定ともとれる。

白い部屋には、彼と裕紀の二人きりだ。狭い室内に飾り気は一切なく、窓際にデスクと本棚、中央に黒いソファの応接セットがあるのみだった。いまはそこに、向き合って座っている。

答えが得られないので、彼は続けた。

「君が、当時イジメを受けていたことは、お母さんのせいじゃない。そう、だれのせいでもないんだ……そうだろう？」

「だれのせいでもない？」

くり返して、裕紀は今度ははつきりと笑った。

「先生、本気でそんなことを？」

裕紀は長い黒髪を耳にかけるような仕草をし、大きな瞳で彼を見た。

「虐められる側に非があるに決まっていますでしょう。だれもそんなこといわないけど、もちろんあのころ、わたしに虐められる原因があったの。当たり前のことだわ」

裕紀は毛先を人差し指に巻きつけながら、くすくすと笑みをこぼした。

「でも先生は立場上、そんなこといえませんよ。だってね、ひとから嫌われる要素をひとつも持っていないような人間なんて、いるわけがないと思いませんか？　そういう意味じゃ、だれだって、虐められて非がないなんていえないの。完璧な人間なんて、いやしないんだから」

急に饒舌になった裕紀に、彼　先生と呼ばれた白衣の男性は、少しだけ眉を顰めたものの、口を挟むようなことはしなかった。こうなると、裕紀はよく喋るのだ。彼はそれを止めるべきではない。「勘違いしないでくださいね、イジメって最低なことです。ただ、虐められる側は何も悪くない、みたいなこと、テレビなんかでよくいってるでしょ。ああいうキレイゴトは嫌いなもの。だってね、この広い世の中で、だれかに嫌われるのは当たり前なもの。同じようにだれかは自分を認めてくれる。そのことに、自分で気づくことが出来るかどうかなのよ、結局」

「そうだね」

それは肯定ではなく、そういう考え方もあるという意味の言葉だ。裕紀もそれは承知していた。だから、続けた。

「父が浮気して家を出たことも、母が病んで首を吊ったこともね、あの人たちが弱かったのも本当だし、わたしに原因の一端があるのも本当。今更そんなこと、わかりきってるんです」

「……でもそれでは少し、君がかわいそうだ。自分を責めることなどないのに」

「だから」

裕紀は苛立たしげに、剣呑な目つきで彼を見た。

「わたしはかわいいそうじゃないし、自分を責めてもいない」

彼はじつと、裕紀を見た。なんて強い眼差しだろう。しかしそれだけに、ひどく脆いものにも思われた。

絶対だと、信じている者の目だ。それ以外をすべて容認しているようで、その実、頑なに自分自身に固執している者の目だ。

「先生……わたしね、幸せなんです。自分が不幸だなんて思ったこと、いままでだって一度もなかったけど、いま本当に、幸せなんです」

裕紀はかみしめるように、そう告げた。その表情は、驚くほど穏やかだった。

「だから、もう心配してくださなくても、大丈夫です」

柔らかな笑みを向けられ、彼はかすかに目を伏せた。裕紀が最初にここを訪れたのは、十歳のときだ。両親の離婚騒動の折りに、母親に連れられて来た。

あのころから、何も変わらない、真っ直ぐな瞳。

「いまならわかるんです……母は、わたしを、愛してくれていたんです」

そつと腹部を撫で、夢見るようにうつとりと、裕紀は微笑んだ。

妊娠しているのだと気づいたときには、ひどい吐き気に襲われた。

恐ろしかった。

子を宿している。自分のなかに、命がある

到底、育てることなどできる気がしなかった。

望んでいない。愛せない。愛せるわけがない。

産科へ初めて訪れた、あの日　泣きながら、墮胎を訴えた。

しかし、産科の医師は奇妙に笑った。中絶は受け入れられず、月日は過ぎていった。

月日の流れは残酷だった。それは裕紀に、変化をもたらした。

あれほど嫌悪していたのに、気づけば腹部に手を当てているのだ。生む気などなかったのに、どうしようもなく、愛しくなっていたのだ。

この子は、自分がいなければ、何もできない
それが、愛しいことのように思われた。

愛しくて、気がつけば、愛していた。

きつと、母親とはそういうものなのだ、裕紀は思った。

「いまでは待ち遠しいんです。……わかりますか？ だから、母も、父も、わたしを愛していなかったわけがないんです。だってこんなにかわいくて、愛しいんだもの。少し、ほんの少し、何かがおかしくなっちゃっただけで、愛されていたんだと、思うことにしたんです」

裕紀は、ゆっくりと立ち上がった。

「心配してくださっているから、ここにも通い続けていたけど、もう来ません、先生。長い間、ありがとうございます」

深々と頭を下げ、裕紀は部屋から出て行った。

彼には、引き止めることが出来なかった。結局ここに来るかどうかは、患者の意志に頼るしかないのだから。

「失礼します」

入れ替わるように、白衣の女性が現れた。

「いま、裕紀さんとすれ違いました。いいんですか？ もう来ないつて、さようならをいわれましたけど」

「うん」

白衣の男性は天井を仰ぎ、大きく息を吐き出した。

「彼はまた来るよ、きつと」

ふと、考えた。愛しても愛しても、生まれるはずのない我が子を憂いて、裕紀は絶望するのだろうか。

彼は首を左右に振った。

きつと、理由を見つけて、自らをなだめすかして、裕紀という一

裕紀

人の男性は、いつまでも幸せであり続けるのだろうか。
「なんだろうね、幸せって」
白衣の女性は笑った。
「思い込むことですよ」

f i n .

(後書き)

ありがとうございました。
心から、感謝いたします。

裕紀

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1585c/>

裕紀

2009年3月24日09時22分発行